

ギターと私(2)－高校時代①

ギターとの出会いとして前回に伯父のことを書いたが、本当の意味での出会い……一時的な出会いではなく、後々まで深く関わっていくという意味での出会い……は、高校時代のことであった。

岐山高校に入学した私は、まず卓球部を探した。中学生の時にクラブ活動としてやっていたからだ。しかし、その高校には卓球部はなかった。昭和 33 年に創立され、私たちが 12 期生である母校は、他校に比べて歴史が浅いせいか、グラウンドは狭く体育館も小さかった。そればかりの理由ではないだろうが、卓球部がなかったのである。かといって、帰宅部になるつもりもなかった私は、確たる理由があつてのことではなかったが、少しばかりギターを弾いていたことあつてか、グラウンドの片隅にあつた別棟の建物(一階が美術室で、二階が音楽室だった)に足を向けた。そこには「音楽部」というクラブがあつたが、それは、合唱や吹奏楽ではなく、クラシックギターだけのクラブだったのだ。

このクラブで顧問をされていたのが、河田重之先生であつた。先生は、クラリネットがご専門の高校の音楽教師だったが、伊東尚生氏(岐阜マンドリンオーケストラの主宰者)にギターも師事していらつしやつたと聞く。で、私が最初に師事した武山明先生も、伊東尚生氏の門下生でいらつしやつたことを考え合わせれば、その後の展開が約束されていた出会いであつたと言えるだろう。「専門はクラリネット、次にギターが好きで、三番目はピアノです。」とは、当時の河田先生の言葉である。

河田先生は、昭和 41 年 4 月から同 47 年 3 月まで岐山高校に在職していらつしやつたが、新任教師として赴任された昭和 41 年からギター部を創設され、生徒たちを指導された。ギター部の期生でいえば、私たちは 4 期生に当たり、現在「岐阜県クラシックギター協会」の理事を務めていらつしやる勝村さんが 2 期生、同協会の吉池さんが 3 期生、そして同協会の副会長を務めていらつしやる近藤清志さんは、私と同期の 4 期生である。このように、河田先生が蒔かれたギターの種が芽吹いて育つたことを考え併せれば、先生は、岐阜のギター界の恩人であろう。やや余談になつてしまつたが、ギター部の思い出はあまり多くない。それは、もっと強烈な体験をすることになるせいだが、そのことは別項で触れるので、ひとまずおく。

ギター部の思い出としては、ビゼーの「真珠採り」やモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」の一楽章を合奏でやったことや、一級先輩の家が経営する旅館で「弾き初め会」が催され、A.カーノの「ワルツ・アンダンティーノ」を弾いたことが記憶に残っている。年代を明らかにすれば、昭和 45 年(1970 年)の正月過ぎのことであつたろう。ちなみに、「弾き初め会」は、真詮ギタースクール友の会のイベントとして平成 19 年(2007 年)1 月に復活し、岐阜県クラシックギター協会のイベントとして 2019 年 1 月まで継続している。さらに、特筆されることに、河田先生もその会に参加され、さらには演奏していらつしやるのだ。

さて、高校 1 年生の秋だつたろうか、はっきり覚えていないが、ある日ギター部の部室に、ギター部 1 期生の先輩が、「ギタリストスギふ」という団体のコンサートの案内に訪問された。後に私も入会することになるその会は、何と 3 か月ごとにコンサートを開催していた。察するに、集客に困つた先輩が、窮余の策として母校の後輩たちを訪ねたに違いない。案内されるままにそのコンサートに出かけた私たち(私と近藤さんともう一人の同級生)は、その後の人生までを変えてしまうような経験をすることになる。

(2019.11.12 記)